



Title	第4回 ウィリアム・モリス研究会
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 2020, 76, p. 148-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76935
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第4回 ウィリアム・モリス研究会

12月21日（土）12:50～17:30

慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎2階 中会議室

主催：意匠学会

後援：慶應義塾大学教養研究センター

慶應義塾大学教育・研究調整予算事業「創造力とコミュニティ」研究会

第1部 作家としてのモリスと創作のインスピレーション

江澤美月（一橋大学兼任講師）

ウィリアム・モリスと詩のコックニー派——『ディネヴィアの弁明とその他の詩』を契機として

川端康雄（日本女子大学教授）

モリスの政治劇『テーブルは覆る、ナプキンズは目覚める』をめぐって

井上亜紗（日本女子大学助教）& 海老名恵（日本女子大学非常勤講師）

モリス協会主催テムズ川遡行ツアーに参加して

第2部 芸術家としてのモリスと私たちへのインスピレーション

横山千晶（慶應義塾大学教授）

ArtとCreativeの意味を問い合わせ——ラスキン、モリスから私たちへの系譜

田邊久美子（大阪薬科大学講師）

バタフィールドとモリス周辺の関連について

藤田治彦（大阪大学大学院名誉教授）

ロセッティ、ジェインとウィリアム・モリス——壁紙《格子垣》とその周辺

青山悟（アーティスト）

《Lonely Labourer》（映像作品11分20秒）の制作について

第4回 ウィリアム・モリス研究会は、二部に分けて開催された。第一部では文筆家としてのウィリアム・モリスに焦点を当て、モリスの詩、戯曲、ユートピア小説に関する発表が行われ、第二部ではアーティストとしてのモリスに焦点を当て、デザイナー、建築、芸術思想、そして21世紀の芸術家に与えた影響の点から発表が行われた。もちろんこの二つの分野を分断して語ることはできないために、発表内容もその後の議論も、モリスの二つの活動を横断する形で行われることになった。発表者は研究者以外にも、実際にウィリアム・モリスにインスピレーションを得て活動を展開しているアーティストも含み、各発表のあとには活発な議論が交わされた。

以下簡単に各発表について報告する。第一部「作家としてのモ里斯と創作のインスピレーション」では、作家としてのモ里斯をめぐる、3つの発表が行われた。江澤美月氏の「ウィリアム・モ里斯の詩とコックニー派——『グィネヴィアの弁明とその他の詩』を契機として」では、批評の視点から、『グィネヴィアの弁明』を読み直す。モ里斯の詩は当時、ラファエル前派との関連のみならず、キーツとの関連からも批判された。発表はその過程からコックニー派批判との関連性を認める斬新な視点を提供した。続く川端康雄氏の「モ里斯の政治劇『テーブルは覆る、ナップキンズは目覚める』をめぐって」では、今まで十分な考察が行われてこなかったモ里斯の政治劇に焦点を当て、当時の上演の様子などを実際に生き生きと報告し、あらためてこの劇の影響と意義を見直すきっかけを与えてくれた。3番目の海老名恵氏と井上亜紗氏の「モ里斯協会主催テムズ川遡行ツアーに参加して」では、モ里斯の『ユートピアだより』で描かれるテムズ川遡行の旅を再体験する船旅に参加した両氏が、19世紀のモ里斯の旅と21世紀の旅との比較から、『ユートピアだより』を読み直した。実際の船旅を紹介する多数のスライドは、参加者全員をもテムズ川の水面にいざなった。

第二部「芸術家としてのモ里斯と私たちへのインスピレーション」では、芸術家・工芸家としてのモ里斯に焦点を当て、同時代および現代におけるその活動の影響を考察した。横山千晶による「ArtとCreativeの意味を問い合わせ——ラスキン、モ里斯から私たちへの系譜」では、現代の教育、町づくり、ものづくりの現場のみならず、政治経済の中でもキーワードとなりつつあるartやcreativityの意味と意義の源泉をラスキンとモ里斯の言説と活動の中に探ることで、その系譜を批判的に跡付けた。続く田邊久美子氏の「バタフィールドとモ里斯周辺の関連について」では、モ里斯、ウィリアム・バタフィールド、ラファエル前派の3者の接点と、彼らのデザインにおけるbarbarismとsimplicityについて論じられた。ラスキンが紹介したゴシック建築の持つ「荒々しさ」の評価は、モ里斯のデザインや、バタフィールドの建築、そしてラファエル前派の絵画にも影響を与え、またこれらの3者も互いに影響を与え合ったのである。第二部の3番目の発表、藤田治彦氏の「ロセッティ、ジェインとウィリアム・モ里斯——壁紙『格子垣』とその周辺——」は、モ里斯の最初の壁紙『格子垣』について、そのデザインのインスピレーションをめぐる議論である。そのインスピレーションは従来、「レッド・ハウス」の薔薇の垣根と中世絵画だったのではないかと考えられてきた。しかし、本発表ではダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの1849年の絵画『マリアの少女時代』との関連を指摘すると同時に、そこに込められた人間関係の象徴を読み解いた。最後の発表は刺繡を使って作品を作り続けているアーティストの青山悟氏による、作品と創作過程についての発表である。青山氏はここ数年間、モ里斯にインスピレーションを受けた作品を制作し続けている。2019年の映像作品、『Lonely Labourer』(映像作品 11分20秒)は、コンピューター・ミシンがウィリアム・モ里斯の手紙の文面を刺繡していく様子を淡々と追ったものであるが、「浪費」「個人」「利益」「労働者」「仕事」など、モ里斯の思想の中核となるキーワードを無機質な空間の中でひたすら機械が刺繡していく様子は、モ里斯の労働観とは相いれないものであるからこそ、テクノロジー全盛の21世紀における労働の意味を問い合わせてくる。

各発表の後には、活発な質疑応答と意見交換が行われ、議論と交流は懇親会の席でも引き続き行われた。参加者も研究者にとどまらず、学生や一般参加者を含む多彩な人々を集め、あらためてウィリアム・モ里斯の影響力の深さと広さを感じさせる研究会であった。